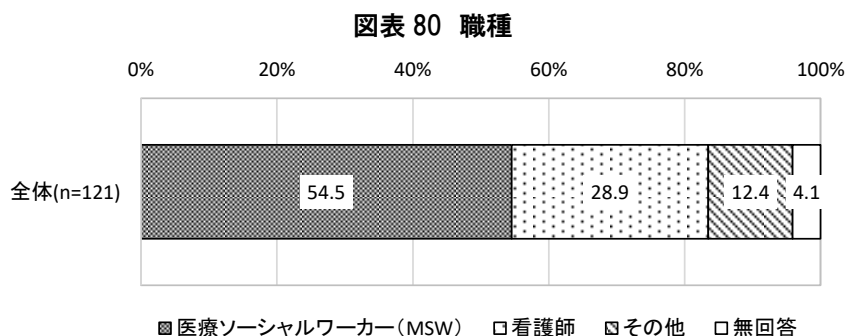


4. 相談支援センター/患者相談窓口調査

1) 回答者属性

■ 職種（問1）

回答者の職種は「医療ソーシャルワーカー」が54.5%で最も高く、次いで「看護師」が28.9%であった。

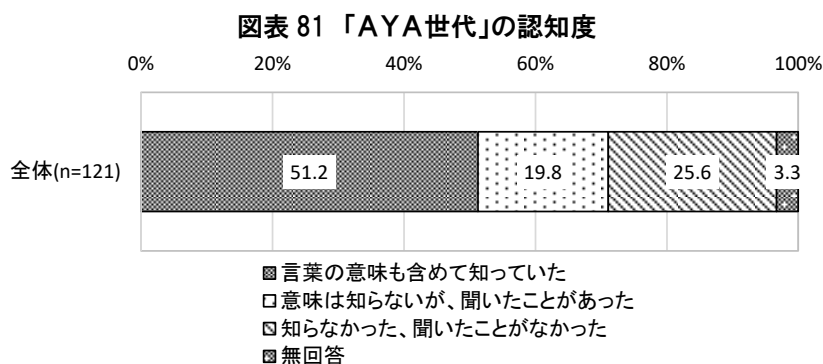


2) AYA世代に関する課題認識

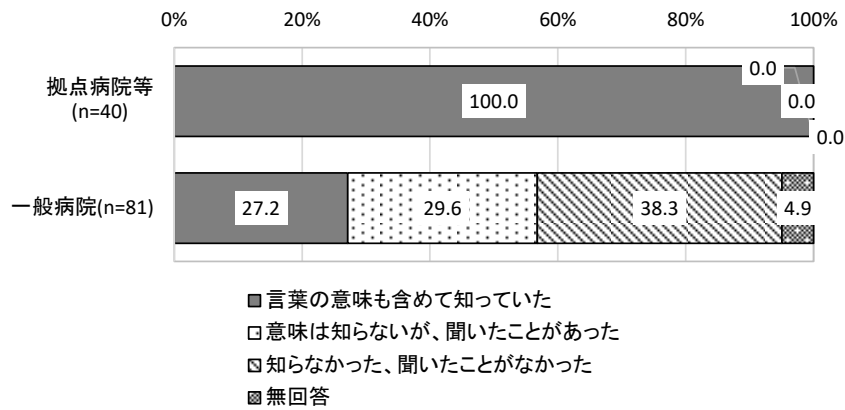
■ 「AYA世代」の認知度（問2）

「AYA世代」の認知度は、「言葉の意味も含めて知っていた」の割合が51.2%であった。一方、「知らなかった、聞いたことがなかった」が25.6%と一定程度存在した。

病院種別にみると、「言葉の意味も含めて知っていた」の割合は拠点病院等では100%であるが、一般病院では27.2%であった。



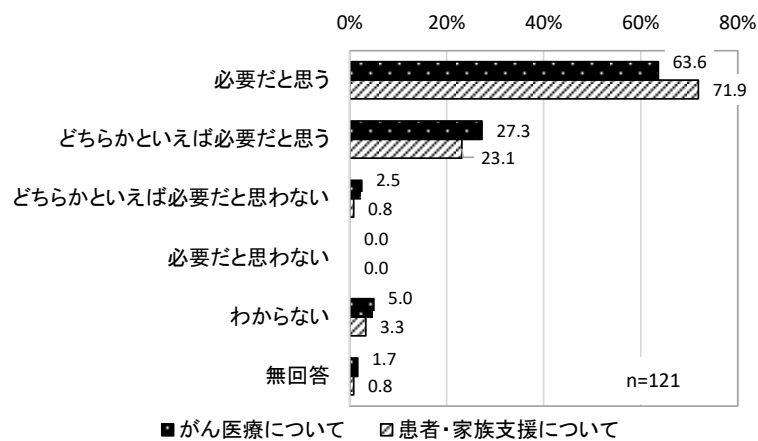
図表 82 「AYA世代」の認知度【病院の種別】



■ AYA世代に対する、他の世代とは異なる対応の必要性（問3）

AYA世代に対する、他の世代とは異なる対応の必要性に関しては、「必要だと思う」が、がん医療については63.6%、患者・家族支援については71.9%であった。

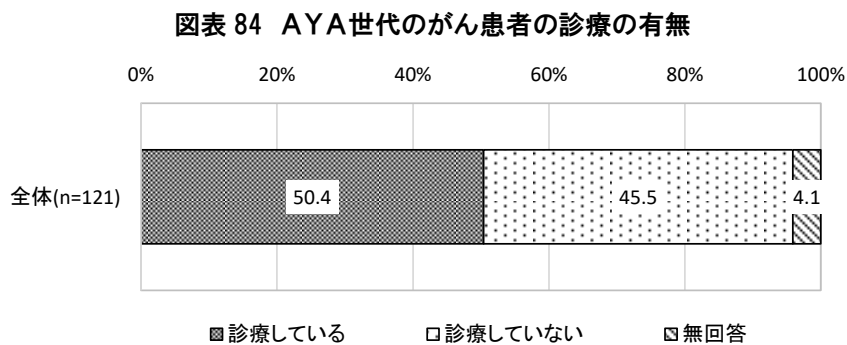
図表 83 AYA世代に対する、他の世代とは異なる対応の必要性



3) AYA世代のがん患者の療養環境

■ AYA世代のがん患者の診療の有無（問4）

病院におけるAYA世代のがん患者の診療の有無は、「診療している」が50.4%、「診療していない」が45.5%であった。



以降は、AYA世代のがん患者について「診療している」（問4）と回答した者について集計。

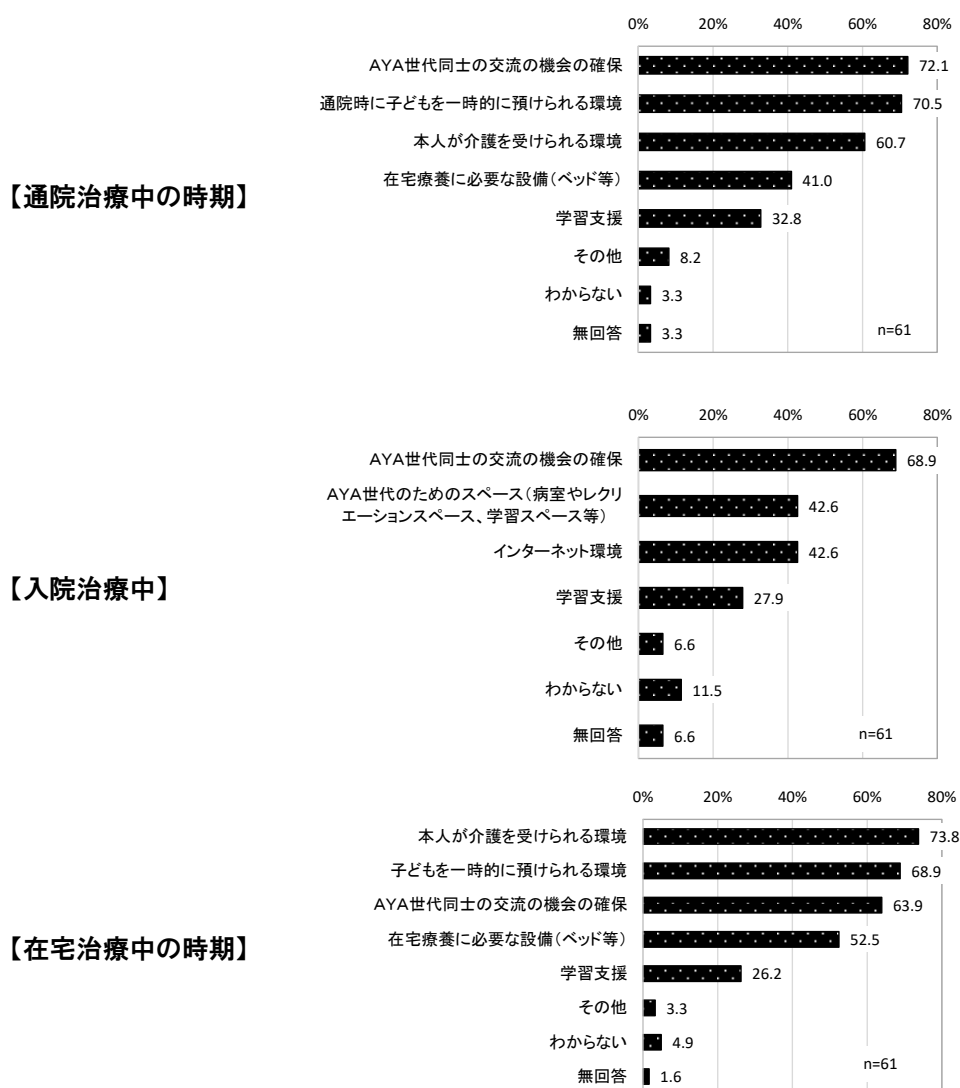
■ AYA世代のがん患者の療養環境として改善が必要なもの（問5）

AYA世代のがん患者の身の回りや生活面への支援・療養環境として改善が必要なものは、通院治療中の時期においては「AYA世代同士の交流の機会の確保」が72.1%で最も高く、次いで「通院時に子どもを一時的に預けられる環境」が70.5%であった。

入院治療中は「AYA世代同士の交流の機会の確保」が68.9%で最も高く、次いで「AYA世代のためのスペース」と「インターネット環境」がそれぞれ42.6%であった。

在宅治療中の時期は「本人が介護を受けられる環境」が73.8%で最も高く、次いで「子どもを一時的に預けられる環境」が68.9%であった。

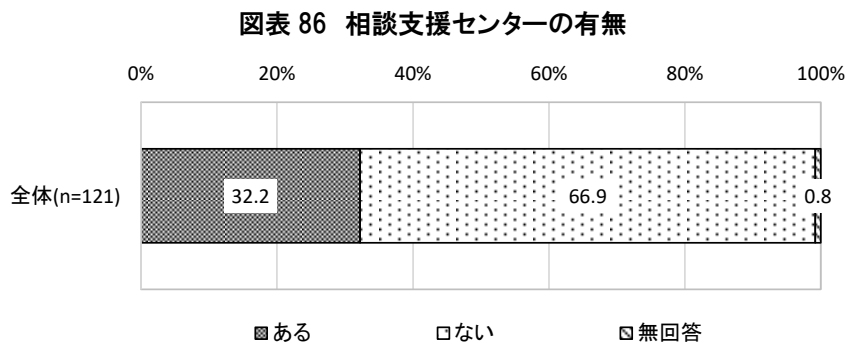
図表 85 AYA世代のがん患者のための療養環境として改善が必要なもの（複数回答）



4) AYA世代のがん患者に対する相談支援

■ がん相談支援センターの有無（問6）

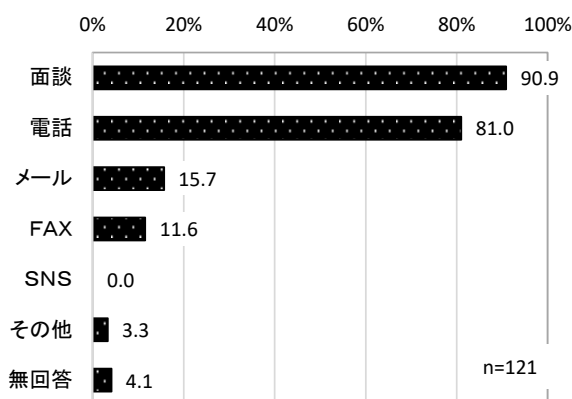
病院における相談支援センターの有無は、「ある」が32.2%、「ない」が66.9%であった。



■ 自院で実施している相談方法（問7）

自院で実施している相談方法は、「面談」が90.9%で最も高く、次いで「電話」が81.0%であった。

図表 87 自院で実施している相談方法(複数回答)

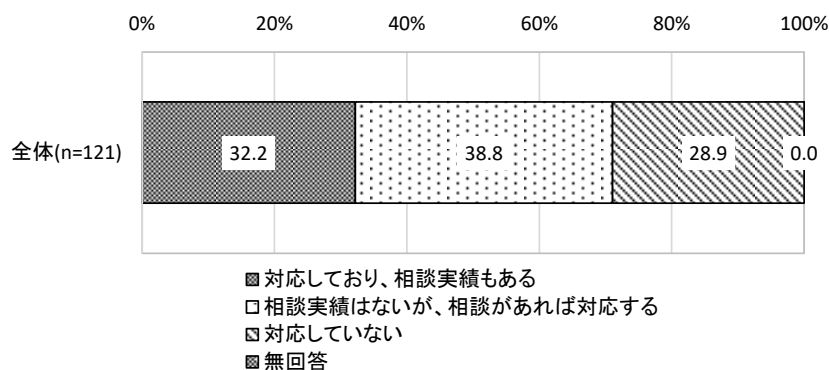


■ AYA世代のがん患者からの相談支援への対応状況（問8）

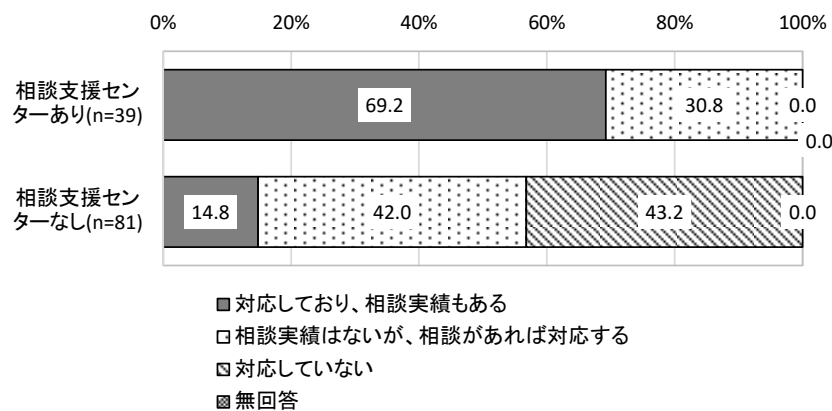
AYA世代のがん患者からの相談支援への対応状況は、「相談実績はないが、相談があれば対応する」が38.8%で最も高く、次いで「対応しており、相談実績もある」が32.2%であった。「対応していない」は28.9%であった。

相談支援センターの有無別にみると、「対応しており、相談実績もある」の割合は、相談支援センターでは69.2%、相談支援センターなしでは14.8%であった。

図表 88 AYA世代のがん患者からの相談支援への対応状況



図表 89 AYA世代のがん患者からの相談支援への対応状況【相談支援センターの有無別】



以降は、AYA世代のがん患者からの相談支援に「対応しており、相談実績もある」(問8)と回答した者について集計。

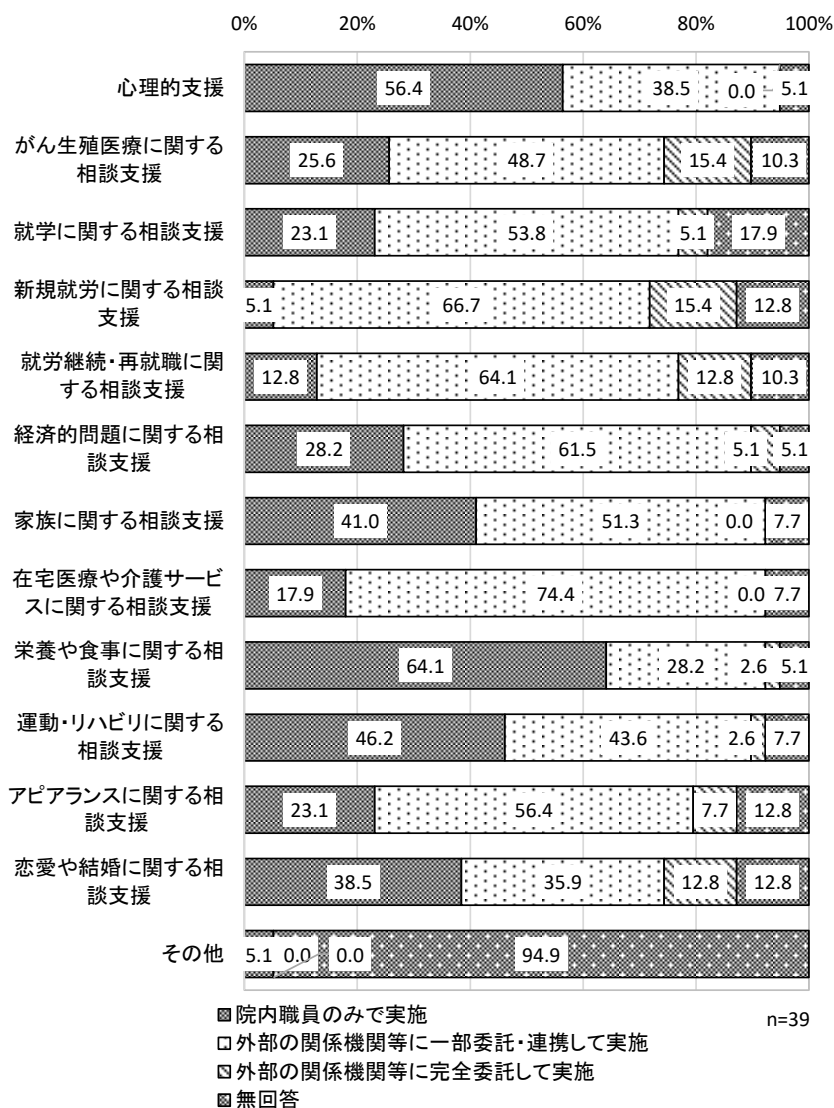
■ AYA世代のがん患者への各支援の実施状況、連携先(問9(1)、(2))

AYA世代のがん患者への支援の実施状況について尋ねたところ、「院内の職員のみで実施」の割合は栄養や食事に関する相談支援が64.1%と最も高く、次いで心理的支援が56.4%であった。

「外部の関係機関等に一部委託・連携して実施」の割合は在宅医療や介護サービスに関する相談支援が74.4%と最も高く、次いで新規就労に関する相談支援が66.7%であった。「外部の関係機関等に完全委託して実施」の割合はがん生殖医療に関する相談支援と新規就労に関する相談支援が15.4%で最も高かった。

「外部の関係機関等に一部委託・連携して実施」または「外部の関係機関等に完全委託して実施」の場合の連携先のうち、「患者団体・患者支援団体」の割合は心理的支援、家族に関する相談支援、恋愛や結婚に関する相談支援において50%以上であった。

図表 90 AYA世代のがん患者への各支援の実施状況



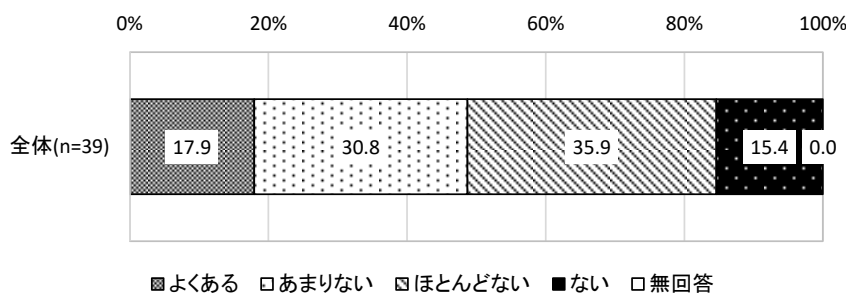
図表 91 AYA世代のがん患者への支援における連携先(複数回答)

	回答数(件)	児が診療連携拠点病院等	国や都府県指定する小	左記以外の医療機関	自治体の窓口	ハローワーク	患者団体・患者支援団	教育機関	業所等(訪問介護提供事	在宅サービス提供事	地域包括支援センター	その他	無回答
心理的支援	15	53.3%	26.7%	40.0%	0.0%	60.0%	6.7%	20.0%	6.7%	0.0%	6.7%		
がん生殖医療に関する相談支援	25	72.0%	68.0%	16.0%	0.0%	12.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.0%	0.0%		
就学に関する相談支援	23	26.1%	8.7%	39.1%	13.0%	21.7%	69.6%	4.3%	4.3%	4.3%	0.0%		
新規就労に関する相談支援	32	12.5%	0.0%	25.0%	81.3%	21.9%	3.1%	3.1%	0.0%	21.9%	6.3%		
就労継続・再就職に関する相談支援	30	16.7%	0.0%	30.0%	70.0%	26.7%	3.3%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%		
経済的問題に関する相談支援	26	7.7%	11.5%	76.9%	7.7%	0.0%	0.0%	3.8%	0.0%	26.9%	3.8%		
家族に関する相談支援	20	25.0%	15.0%	55.0%	5.0%	55.0%	15.0%	35.0%	40.0%	15.0%	5.0%		
在宅医療や介護サービスに関する相談支援	29	6.9%	24.1%	55.2%	0.0%	10.3%	3.4%	75.9%	69.0%	13.8%	3.4%		
栄養や食事に関する相談支援	12	8.3%	8.3%	8.3%	8.3%	8.3%	0.0%	50.0%	50.0%	41.7%	8.3%		
運動・リハビリに関する相談支援	18	16.7%	38.9%	22.2%	0.0%	5.6%	0.0%	61.1%	55.6%	5.6%	0.0%		
アピアランスに関する相談支援	25	28.0%	12.0%	16.0%	4.0%	36.0%	0.0%	4.0%	4.0%	64.0%	0.0%		
恋愛や結婚に関する相談支援	19	15.8%	5.3%	5.3%	0.0%	63.2%	5.3%	0.0%	0.0%	26.3%	0.0%		

■ 院外のAYA世代のがん患者からの相談の頻度(問10)

院外 of AYA 世代のがん患者からの相談は、「ほとんどない」が 35.9% で最も多く、次いで「あまりない」が 30.8% であった。

図表 92 院内のAYA世代のがん患者からの相談の頻度

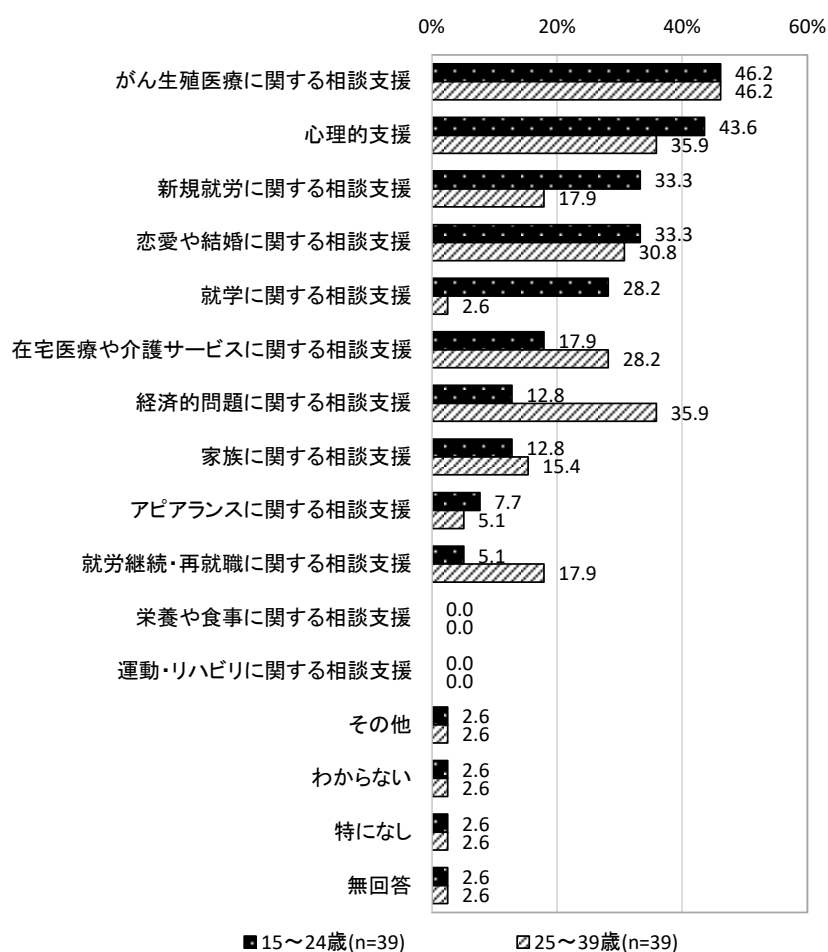


■ 他の世代と比べて対応が難しいもの（問 11）

AYA世代のがん患者からの相談のうち、自院において他の世代と比べて対応が難しいものは、15～24歳の場合は「がん生殖医療に関する相談支援」が46.2%で最も高く、次いで「心理的支援」が43.6%、「新規就労に関する相談支援」と「恋愛や結婚に関する相談支援」がそれぞれ33.3%であった。また、「就学に関する相談支援」が28.2%であった。

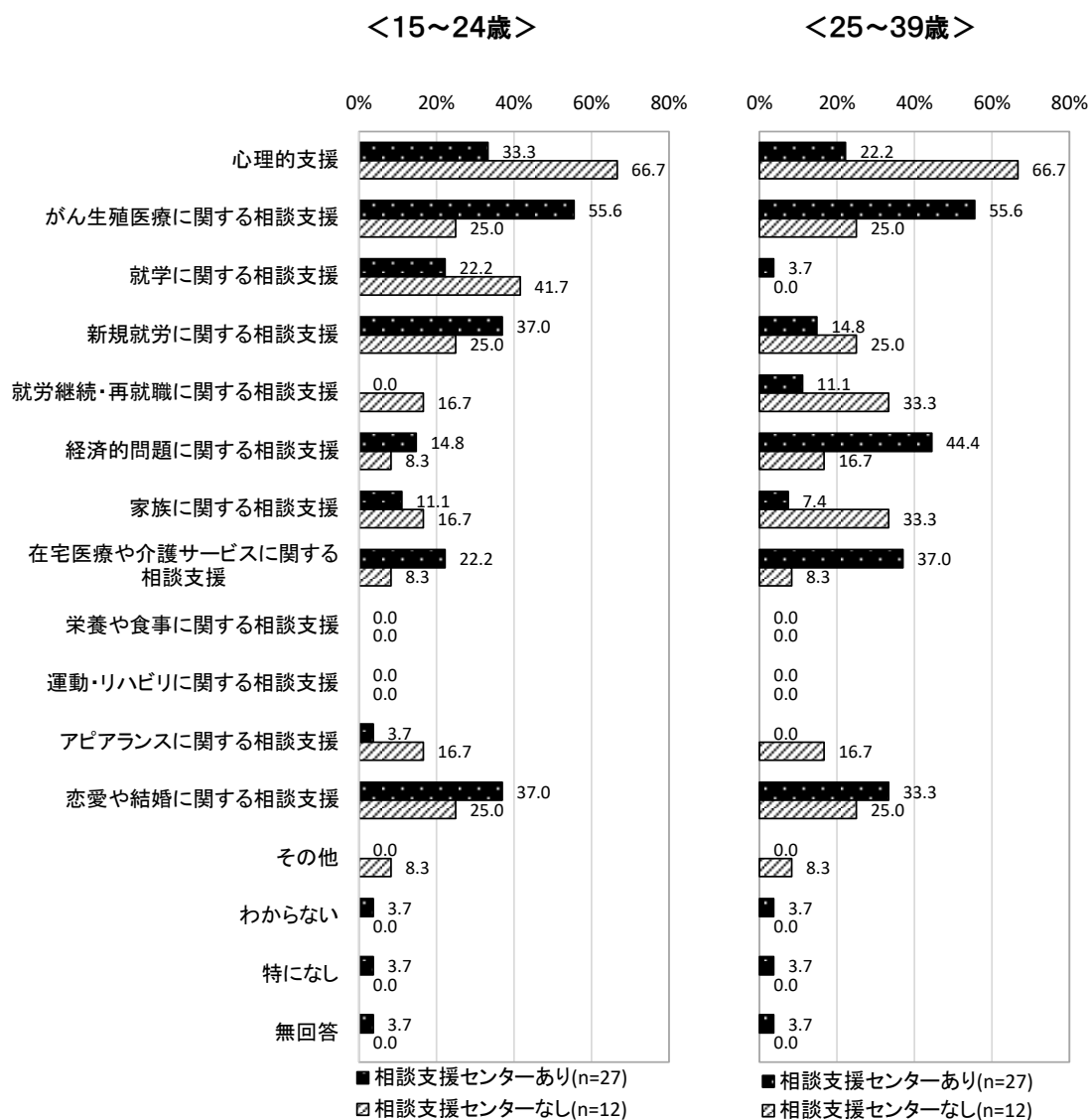
25～39歳の場合は「がん生殖医療に関する相談支援」が46.2%で最も高く、次いで「心理的支援」と「経済的問題に関する相談支援」がそれぞれ35.9%であった。また、「就労継続・再就職に関する相談支援」が17.9%であった。

図表 93 AYA世代のがん患者からの相談のうち他の世代と比べて対応が難しいもの（複数回答：3つまで）



今後、自院がAYA世代のがん患者からの相談に対応していく上で必要だと考える取組について、相談支援センターの有無別にみると、いずれの年齢のがん患者に対しても、相談支援センターありの場合では「がん生殖医療に関する相談支援」が最も高く、相談支援センターなしの場合では「心理的支援」が最も高かった。

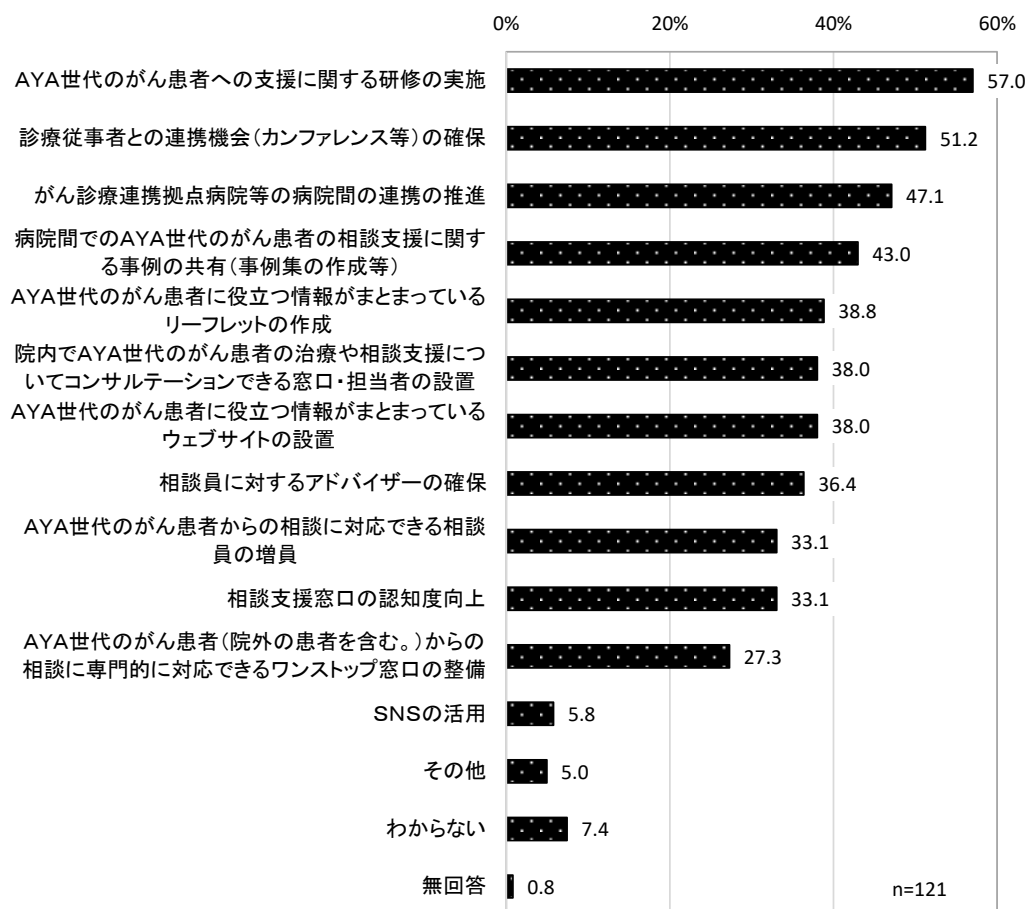
図表 94 AYA世代のがん患者からの相談のうち他の世代と比べて対応が難しいもの(複数回答:3つまで)
【相談支援センターの有無別】



■ 今後、自院がAYA世代のがん患者からの相談に対応していく上で必要だと考える取組（問12）

今後、自院がAYA世代のがん患者からの相談に対応していく上で必要だと考える取組は、「AYA世代のがん患者への支援に関する研修の実施」が57.0%で最も高く、次いで「診療従事者との連携機会（カンファレンス等）の確保」が51.2%、「がん診療連携拠点病院等の病院間の連携の推進」が47.1%であった。

図表 95 今後、自院がAYA世代のがん患者からの相談に対応していく上で必要だと考える取組（複数回答）

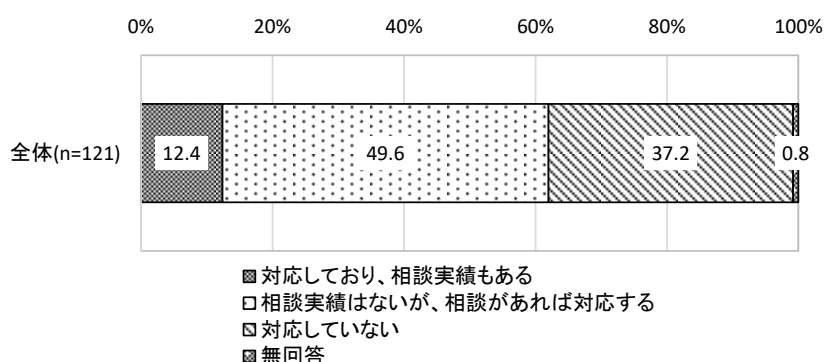


以降は、全ての相談支援センター/患者相談窓口について集計。

■ 治療が終了したAYA世代のがん患者からの相談への対応（問 13）

治療が終了したAYA世代のがん患者からの相談への対応は、「相談実績はないが、相談があれば対応する」が49.6%で最も高く、次いで「対応していない」が37.2%であった。「対応しており、相談実績もある」は12.4%であった。

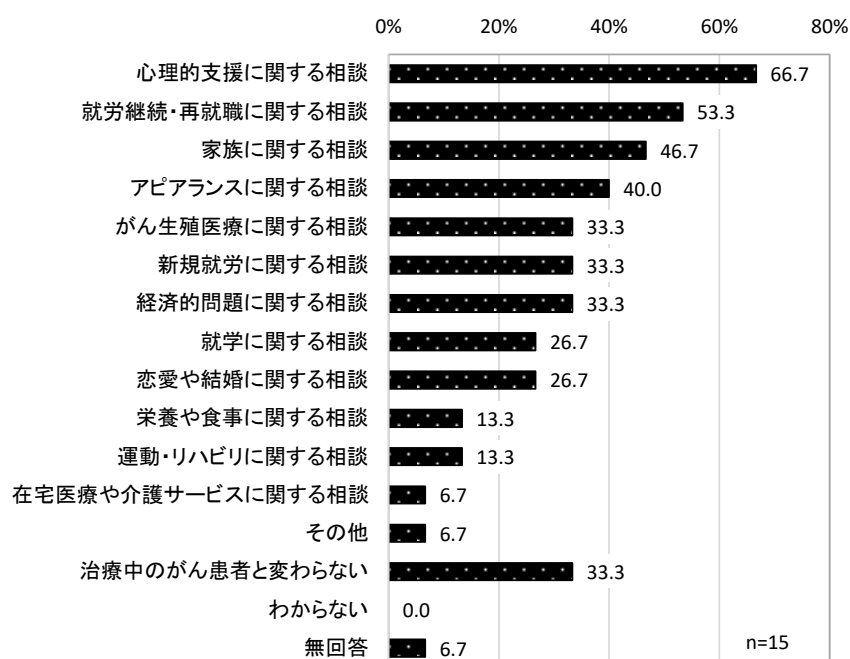
図表 96 治療が終了したAYA世代のがん患者からの相談への対応状況



■ 治療中のAYA世代のがん患者と比べて、相談支援ニーズの高い内容（問 13-1）

治療が終了したAYA世代のがん患者からの相談への対応について「対応しており、相談実績もある」と回答した者について、治療中のAYA世代のがん患者と比べて、相談支援ニーズの高い内容を尋ねたところ、「心理的支援に関する相談」が66.7%で最も高く、次いで「就労継続・再就職に関する相談」が53.3%、「家族に関する相談」が46.7%であった。

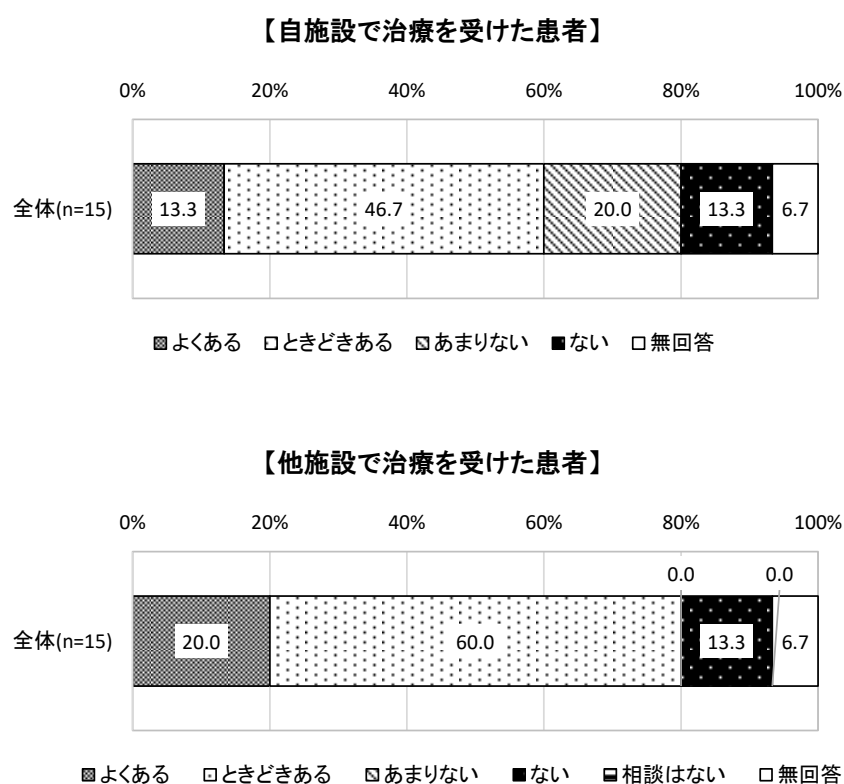
図表 97 治療中のAYA世代のがん患者と比べて、相談支援ニーズの高い内容(複数回答)



■ 治療中のAYA世代のがん患者と比べて、支援が難しいと感じる頻度（問 13-2）

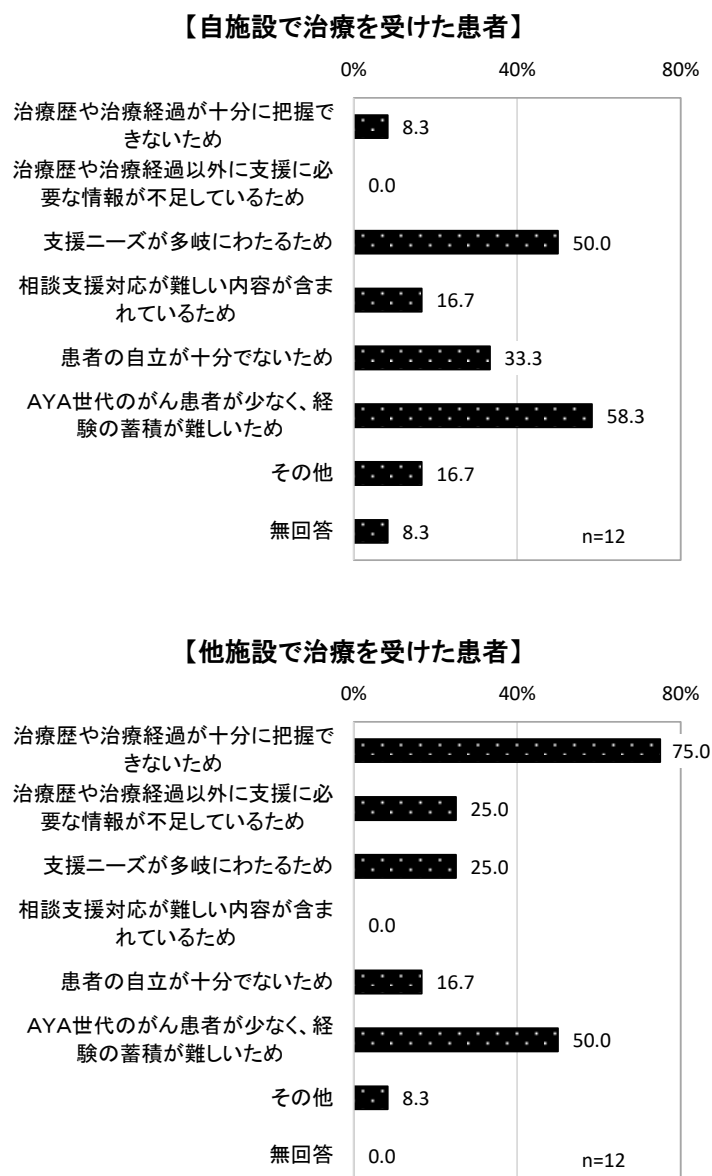
治療が終了したAYA世代のがん患者からの相談への対応について「対応しており、相談実績もある」と回答した者について、治療中のAYA世代のがん患者と比べて支援が難しいと感じることの有無を尋ねたところ、自施設で治療を受けた患者に関しては「ときどきある」が46.7%で最も高く、次いで「あまりない」が20.0%であった。他施設で治療を受けた患者に関しては「ときどきある」が60.0%で最も高く、次いで「よくある」が20.0%であった。「よくある」「ときどきある」「あまりない」の合計は、自施設で治療を受けた患者、他施設で治療を受けた患者ともに80.0%であった。

図表 98 治療中のAYA世代のがん患者と比べて支援が難しいと感じる頻度



治療が終了したAYA世代のがん患者からの相談への対応に関して、治療中のAYA世代のがん患者と比べて支援が難しいと感じることが「よくある」「ときどきある」「あまりない」のいずれかであると回答した者について、支援が難しいと感じる理由を尋ねたところ、自施設で治療を受けた患者に関しては「AYA世代のがん患者が少なく、経験の蓄積が難しいため」が58.3%で最も高く、次いで「支援ニーズが多岐にわたるため」が50.0%であった。他施設で治療を受けた患者に関しては「治療歴や治療経過が十分に把握できないため」が75.0%で最も高く、次いで「AYA世代のがん患者が少なく、経験の蓄積が難しいため」が50.0%であった。

図表 99 治療中のAYA世代のがん患者と比べて支援が難しいと感じる理由(複数回答)



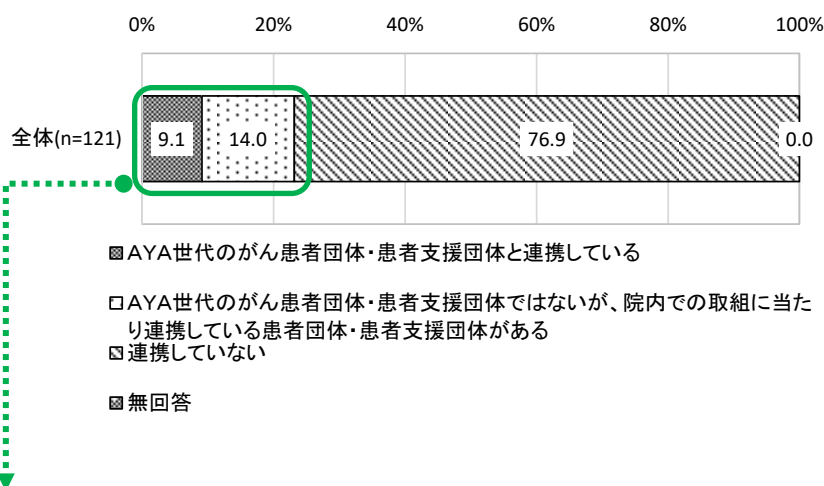
5) AYA世代のがん患者等を対象とした患者サロン・ピアサポート等

■ 患者団体・患者支援団体との連携の有無・内容（問 14、14-1）

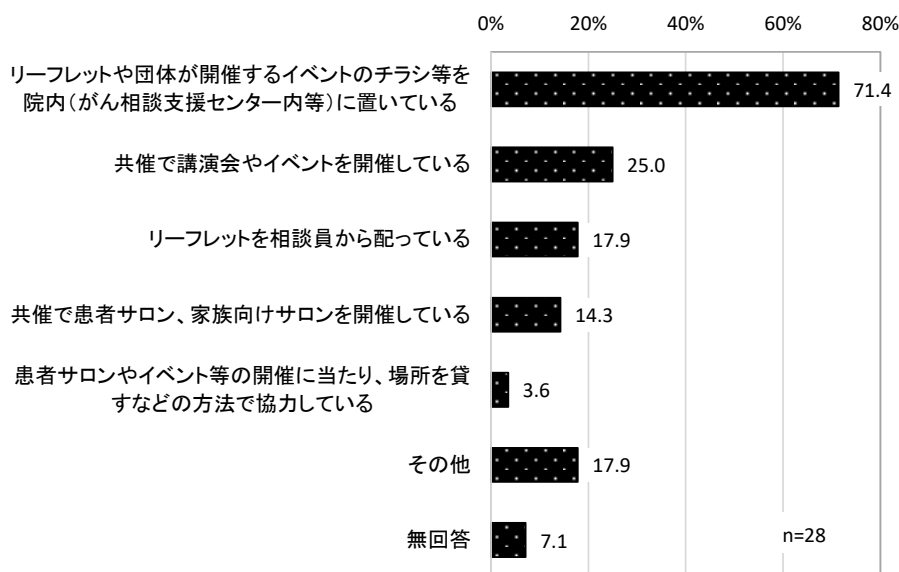
AYA世代のがん患者への支援における患者団体・患者支援団体との連携状況は、「連携していない」が76.9%で最も高く、「AYA世代のがん患者団体・患者支援団体ではないが、院内での取組に当たり連携している患者団体・患者支援団体がある」が14.0%、「AYA世代のがん患者団体・患者支援団体と連携している」が9.1%であった。

「AYA世代のがん患者団体・患者支援団体と連携している」または「AYA世代のがん患者団体・患者支援団体ではないが、院内での取組に当たり連携している患者団体・患者支援団体がある」と回答した場合の連携内容は、「リーフレットや団体が開催するイベントのチラシ等を院内（がん相談支援センター内等）に置いている」が71.4%で最も高かった。

図表 100 AYA世代のがん患者への支援における患者団体・患者支援団体との連携状況



図表 101 患者団体・患者支援団体との連携している場合の連携内容（複数回答）

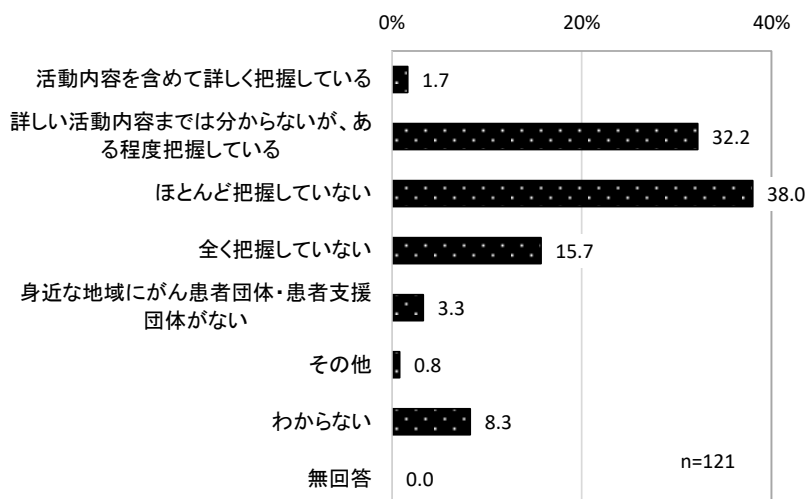


※その他：次のような回答があった。
患者サロンへの参加や個別相談/相談員が患者団体の開催するイベントなどに参加している。/
自院で若年性乳がん患者サロン開催している。/団体が主催する講演会などに講師として参加している。/
がんサロンの際に資料を置いている。

■ 地域のがん患者団体・患者支援団体の把握の有無（問 15）

地域のがん患者団体・患者支援団体の把握の有無は、「ほとんど把握していない」が38.0%で最も高く、次いで「詳しい活動内容までは分からないが、ある程度把握している」が32.2%であった。

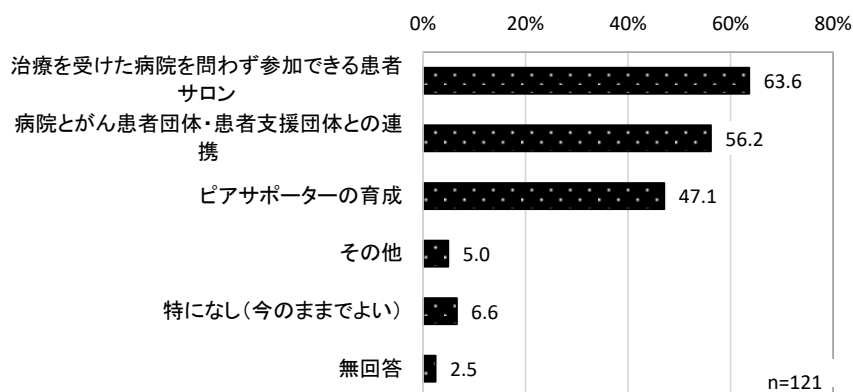
図表 102 地域のがん患者団体・患者支援団体の把握の有無



■ AYA世代のがん患者同士またはピアサポーターによる支援において今後充実が必要だと考える取組（問 16）

AYA世代のがん患者同士またはピアサポーターによる支援において、充実が必要だと考える取組は、「治療を受けた病院を問わず参加できる患者サロン」が63.6%で最も高く、次いで「病院とがん患者団体・患者支援団体との連携」が56.2%であった。

図表 103 AYA世代のがん患者同士またはピアサポーターによる支援において今後充実が必要だと考える取組（複数回答）



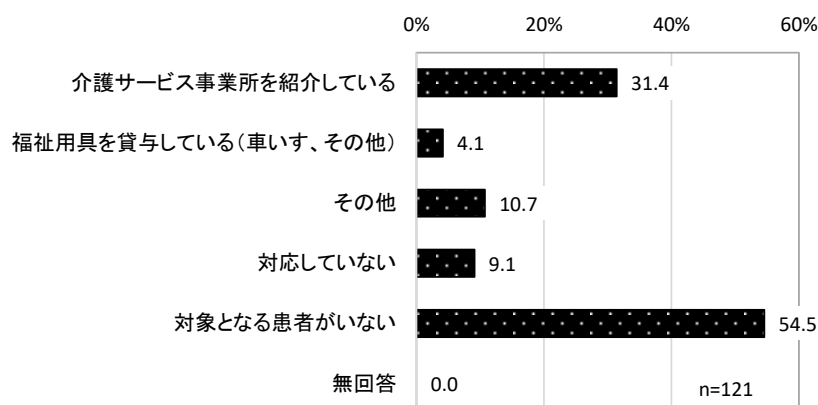
6) AYA世代のがん患者における介護サービス

■ 福祉用具・介護サービスの利用を必要とする場合の対応（問17）

福祉用具・訪問介護サービスの利用を必要とするAYA世代のがん患者に対する対応は、「介護サービス事業所を紹介している」が31.4%で最も高かった。「対応していない」は9.1%、「対象となる患者がいない」が54.5%であった。

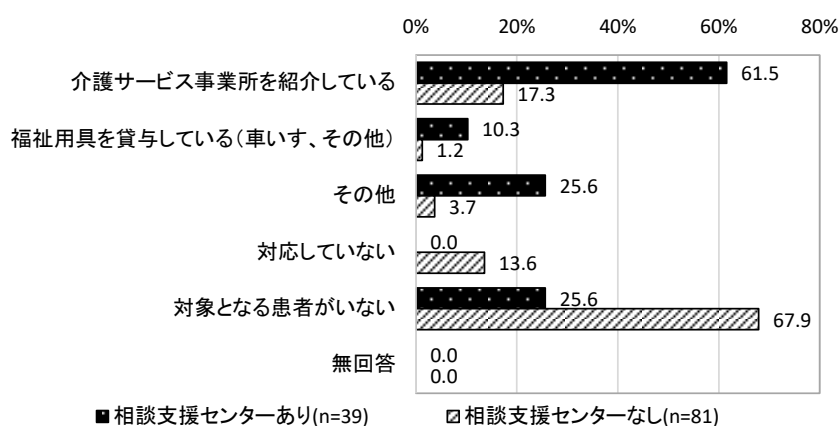
相談支援センターの有無別にみると、相談支援センターの有無に関わらず「介護サービス事業所を紹介している」が最も高かったが、「対象となる患者がいない」の割合は相談支援センターなしの場合で67.9%と特に高かった。

図表 104 福祉用具・訪問介護サービスの利用を必要とするAYA世代のがん患者に対する対応（複数回答）



図表 105 福祉用具・訪問介護サービスの利用を必要とするAYA世代のがん患者に対する対応（複数回答）

【相談支援センターの有無別】

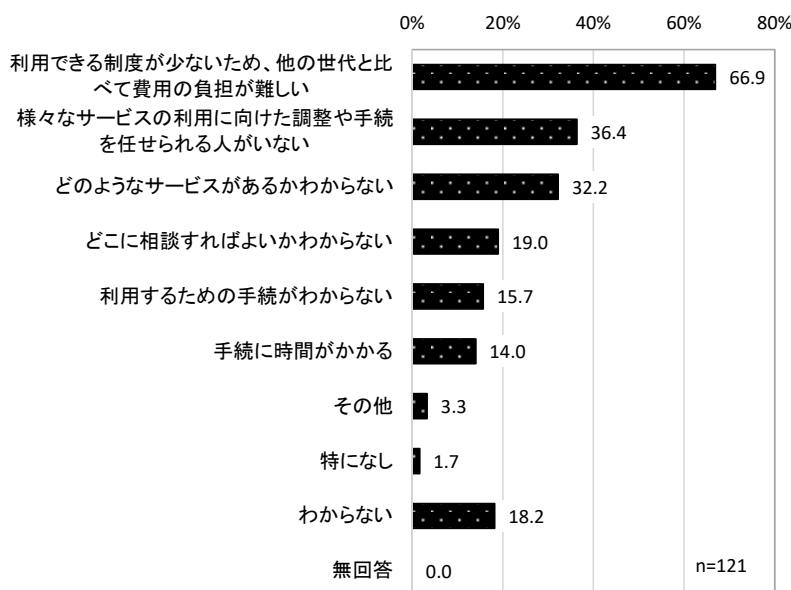


■ AYA世代のがん患者が介護サービスを利用するに当たっての課題（問18）

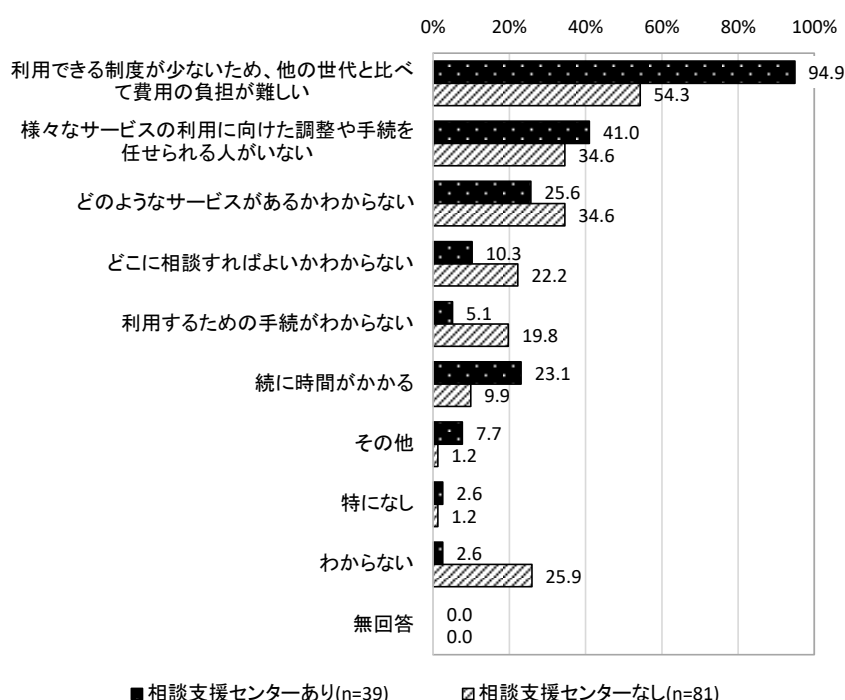
AYA世代のがん患者が介護サービスを利用するに当たっての課題は、「利用できる制度が少ないため、他の世代と比べて費用の負担が難しい」が66.9%で最も高く、次いで「様々なサービスの利用に向けた調整や手続を任せられる人がいない」が36.4%であった。

相談支援センターの有無別にみると、相談支援センターがある場合では「利用できる制度が少ないため、他の世代と比べて費用の負担が難しい」が94.9%と特に高かった。

図表 106 AYA世代のがん患者が介護サービスを利用するに当たっての課題（複数回答）



図表 107 AYA世代のがん患者が介護サービスを利用するに当たっての課題（複数回答）
【相談支援センターの有無別】



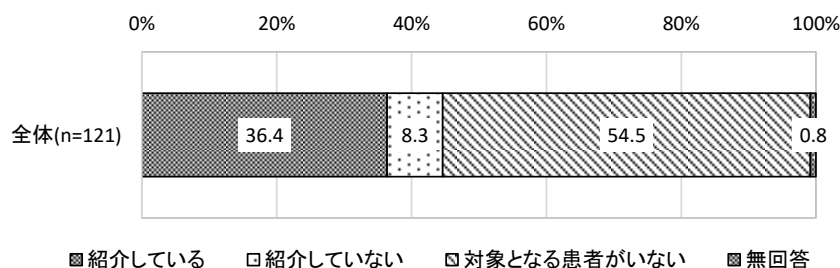
7) AYA世代のがん患者における医療費負担

■ 医療費に関する相談窓口等の紹介の有無、紹介先（問 19、問 19-1）

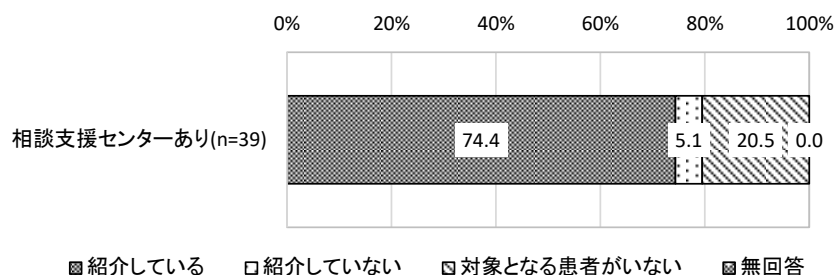
医療費の負担が困難なAYA世代のがん患者に対する、医療費に関する相談窓口等の紹介の有無は、「紹介している」が36.4%、「紹介していない」が8.3%、「対象となる患者がいない」が54.5%であった。

相談支援センターがある場合に限定すると、「紹介している」が74.4%、「紹介していない」が5.1%であった。

図表 108 医療費の負担が困難なAYA世代のがん患者に対する
医療費に関する相談窓口等の紹介の有無

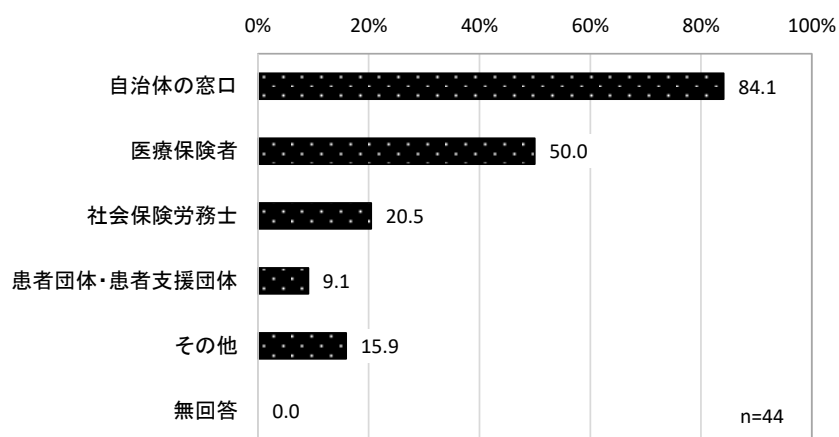


図表 109 医療費の負担が困難なAYA世代のがん患者に対する
医療費に関する相談窓口等の紹介の有無
【相談支援センターがある場合】



医療費の負担が困難なAYA世代のがん患者に対して、医療費に関する相談窓口等を「紹介している」と回答した者について、医療費に関する相談窓口等を尋ねたところ、「自治体の窓口」が84.1%で最も高く、次いで「医療保険者」が50.0%であった。

**図表 110 医療費の負担が困難なAYA世代のがん患者に対して紹介する
医療費に関する相談窓口等(複数回答)**

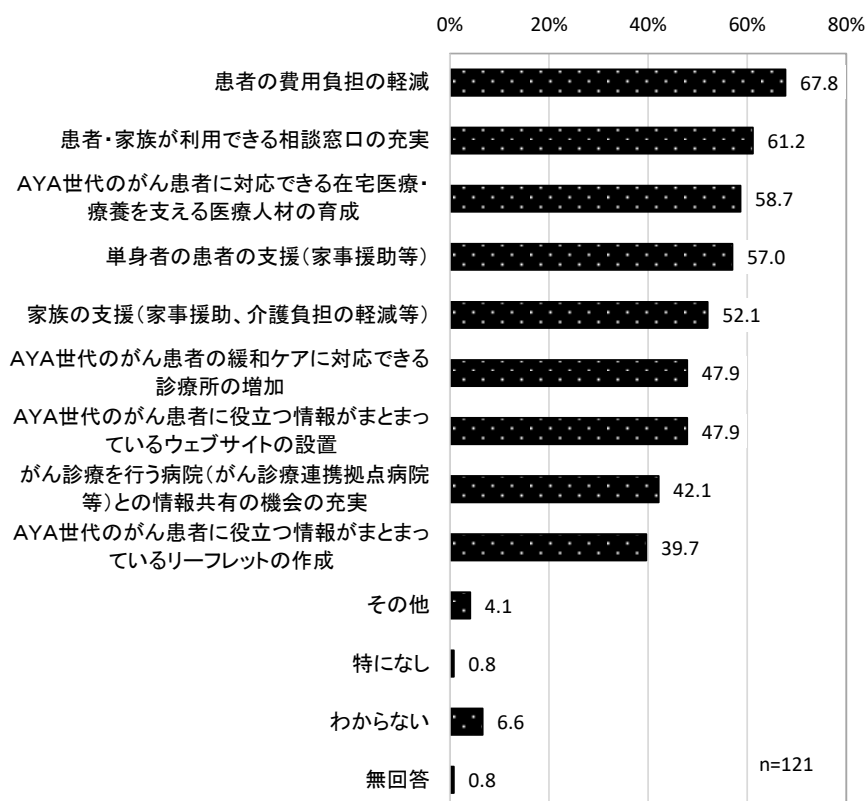


8) AYA世代のがん患者に対する在宅医療の状況

■ 今後充実させる必要があると考える取組（問20）

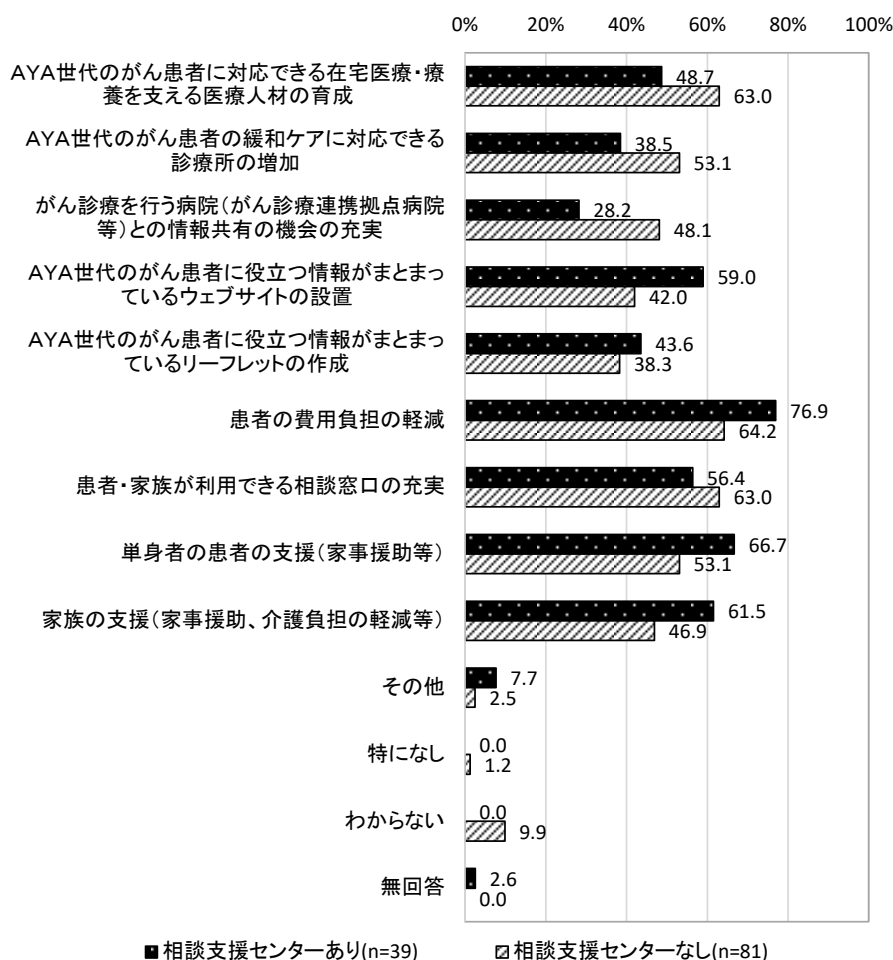
AYA世代のがん患者の在宅医療・療養に関して、今後充実させる必要があると考える取組は、「患者の費用負担の軽減」が67.8%で最も高く、次いで「患者・家族が利用できる相談窓口の充実」が61.2%、「AYA世代のがん患者に対応できる在宅医療・療養を支える医療人材の育成」が58.7%であった。

図表 111 AYA世代のがん患者の在宅医療・療養に関して今後充実させる必要があると考える取組(複数回答)



AYA世代のがん患者の在宅医療・療養に関して、今後充実させる必要があると考える取組について相談支援センターの有無別にみると、相談支援センターがない場合は「がん診療を行う病院（がん診療連携拠点病院等）との情報共有の機会の充実」が48.1%と、がん相談支援センターがある場合（28.2%）に比べて15ポイント以上高かった。

図表 112 AYA世代のがん患者の在宅医療・療養に関して今後充実させる必要があると考える取組(複数回答)
【相談支援センターの有無別】



9) AYA世代のがん患者に対する就学支援

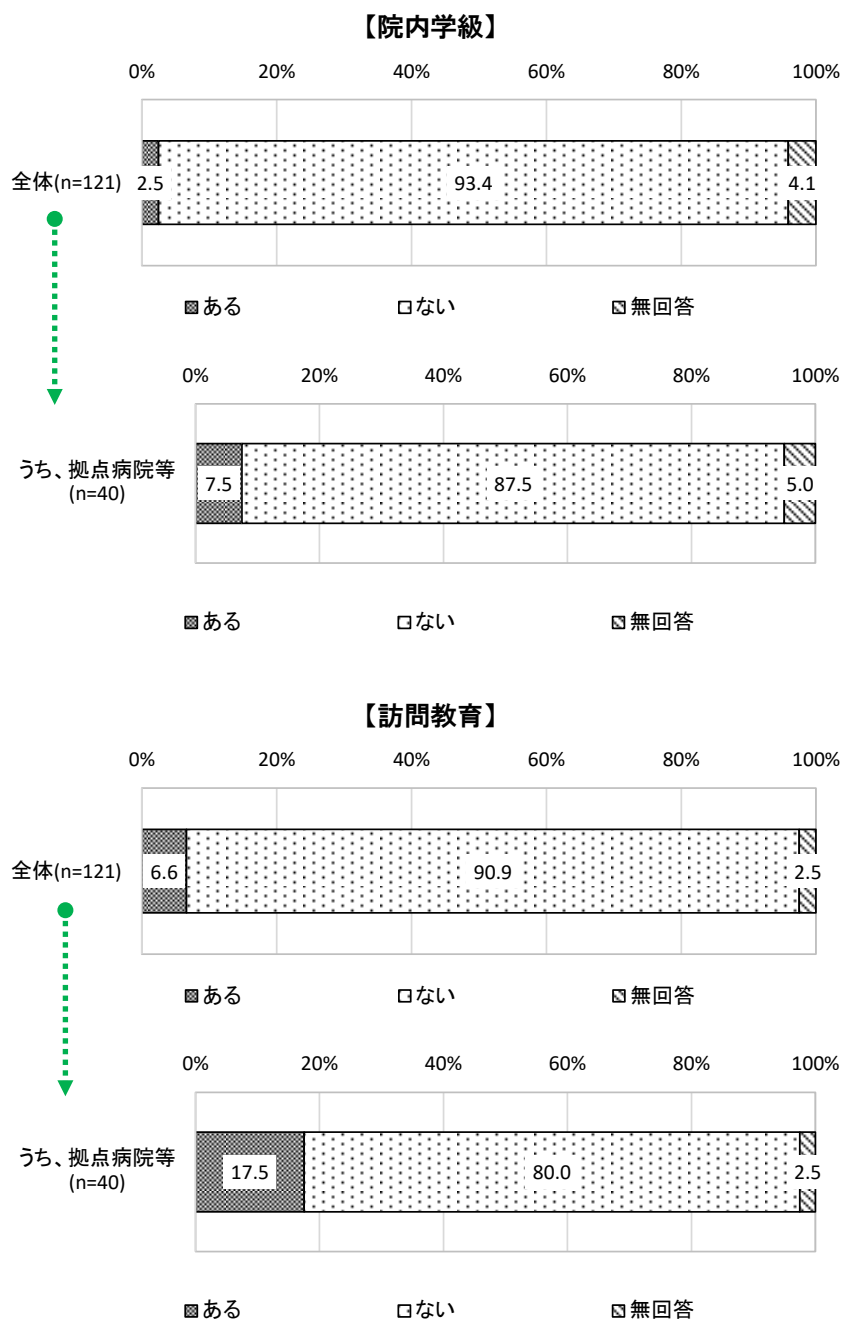
■ 高校生のがん患者に対応した院内学級、訪問教育の有無（問 21）

高校生のがん患者に対応した院内学級が「ある」は2.5%（n=3、内訳はすべて拠点病院等）、訪問教育が「ある」は6.6%（n=8、うち拠点病院等は7件）であった。

院内学級が「ある」場合の1週間当たりの実施日数は平均4.0日、1日当たりの実施時間は平均2.5時間であった。

訪問教育が「ある」場合の1週間当たりの実施日数は平均3.2日、1日当たりの実施時間は平均1.5時間であった。

図表 113 高校生のがん患者に対応した院内学級、訪問教育の有無

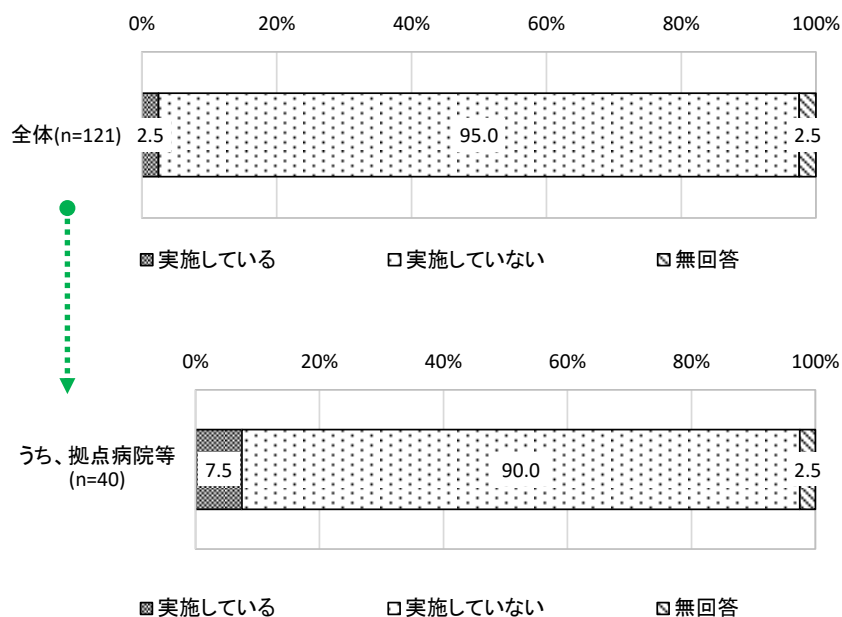


■ その他、高校生のがん患者に対する学習支援の実施の有無（問 22、問 22-1(1)～(3)）

院内学級や訪問教育以外の高校生のがん患者に対する学習支援に関しては、「実施している」が2.5%（n=3、内訳はすべて拠点病院等）であった。

学習支援を「実施している」場合の1週間当たりの実施日数は平均1.7日、1日当たりの実施時間は平均1.3時間であった。また、支援者は教員が1件、その他が1件であった。ボランティアの有無は、すべて「ボランティアの支援者はいない」であった。

図表 114 高校生のがん患者に対応した院内学級、訪問教育以外の学習支援の実施の有無



10) A Y A世代のがん患者に対する医療や支援に関するご意見・ご要望

A Y A世代のがん患者に対する医療や支援に関するご意見・ご要望として、次の意見があった。

<医療提供体制>

○医療提供体制の整備

- ・ 重症心身障害者に対応できる医療機関がない（痛みの訴えができない方への疼痛コントロールをどうしていくか）。
- ・ 就労中の患者が訪問診療を希望したが、平日の日中は仕事のため定期訪問が適わなかったため、実現しなかった。この場合、緊急時は救急外来を利用することになり、患者、家族の身体的、精神的苦痛になってくると思われる。

<他の世代とは異なる対応の必要性>

○他の世代とは異なる対応の必要性

- ・ AとYAと一緒に語るのは難しい。Aにはほぼ対応なし。YAには、通常の知識に加え配慮をして関わることもあるが、性別によっても小さな仲間で集みたい、ネットを好む等の違いがあるので、対応に限りがある。
- ・ A Y A世代といっても20歳代前半までと、それ以上年齢が上の人とはかなり問題が異なる。いずれも病院あたりの患者数はあまり多くないため、患者サロンやA Y Aへの支援体制は病院が主体というより、自治体が主導して病院も連携する形が望ましいのではと考える。
- ・ 医療費の軽減、社会人の職場への理解、単身者への介護などの支援などが必要ではないか。
- ・ A Y A世代に関わらず、がんに対する社会資源はとても少ないと思います。実際に医療的には高額療養費支給制度くらいしか利用できるサービスがない方が多数です。現在は治療も多くのバリエーションがあるので、それにあわせて多くの人が手間なく利用できるようなればと思います。

等

○ライフイベントに関する支援

【就学】

- ・ 病院により学習できる環境が違う。
- ・ 公立小中学校生は院内学級、訪問学級を利用し、退院後地元校に戻ることができる。私立、国立小中学校生および高校生は学籍、入試の問題があり院内学級、訪問学級を利用しづらい。入院児には二重学籍を認めてほしい。また、10代の子が集まれる部屋と機会が必要と考える。

等

○経済的な支援

- ・ 指定難病や身体障害認定基準に該当しない（手続きする時間的余裕がない）場合、在宅療養のための環境整備や福祉用具などの利用に多額の費用負担が生じることが大変です。
- ・ 公的な支援制度がないため、経済面で大変な思いをしている方が多い。

- ・ 介護保険の対象外のためサポートを導入しづらい、子育て支援に関する費用負担や助成を使
いづらい。

- ヘルパーなどの社会資源の活用支援や治療費用の貸付など（奨学金の返済をしながら一人暮らしをしている若者は預金もなく、お金を借りる余裕もありません）。 等

＜AYA世代のがん患者に対する相談支援体制＞

- 相談支援が必須な世代だと思いますが、ワンストップの相談窓口よりも今ある相談支援センターを活用し、どのような支援が望ましいかを考えていくべきだと思います。相談支援センターはどのような世代でも対応すべきですし、ワンストップの役割を果たすべきです。
- 心理的支援カウンセラーや心理士との連携をとりやすくしたい。本人だけでなく親、配偶者、子どもへの支援も一緒に行える体制がほしい。
- 在宅医療、介護を支援するためにコーディネーター設置が必要。
- AYA世代のがん患者が活用できる社会資源を学ぶとともに、病院の支援体制を整えるなど、院内への働きかけも必要と考えられる。 等

＜AYA世代のがん患者への対応のために必要な情報等＞

- AYA世代というワードの普及や支援方法について、学べる機会があれば参加したいと思いました。
- AYA世代のがん患者への支援に関する研修を希望します。
- 患者数も少ないため、ほとんど相談はありません。相談があったときのために情報がまとまっているウェブサイトがあれば利用したいと思っています。
- 相談件数が少なく事例の蓄積が難しいため、よく対応している病院と連携体制が取れるとより支援が充実すると思います。相談員がAYA世代のがん患者の方と一緒に学ぶ研修会などを企画していただけると嬉しいです。 等

＜その他＞

- ウィッグや人工乳房などを含む、それぞれの疾患特有の状態に合ったAYA世代向けの衣類や日用品、化粧品、福祉用具などがもっと必要だし、情報も入手しやすくなればいいと思う。
- 介護保険と同様の外部サービスを、社会保険を使って受けられるシステムの構築が必要。
- 医師・看護師が患者、家族と向き合う時間を多く取り、寄り添うことが大切だと考える。時間の捻出、考えや思いを知ることが大切であると思う。 等

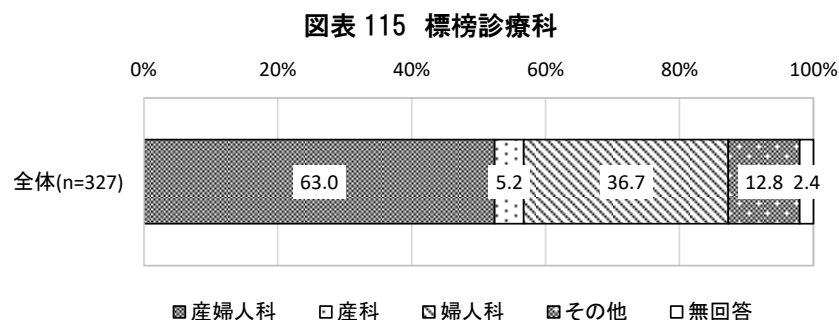
以上

5. 診療所調査（生殖医療）

1) 回答者属性

■ 標榜診療科（問1）

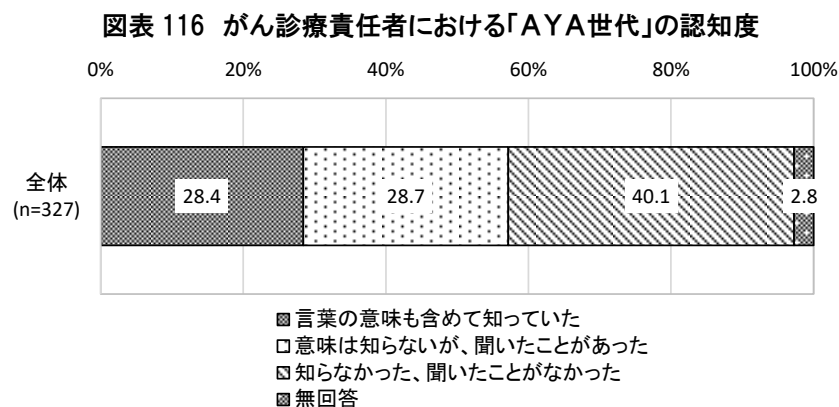
標榜診療科は「産婦人科」が63.0%で最も高く、次いで「婦人科」が36.7%であった。



2) AYA世代に関する課題認識

■ 「AYA世代」の認知度（問2）

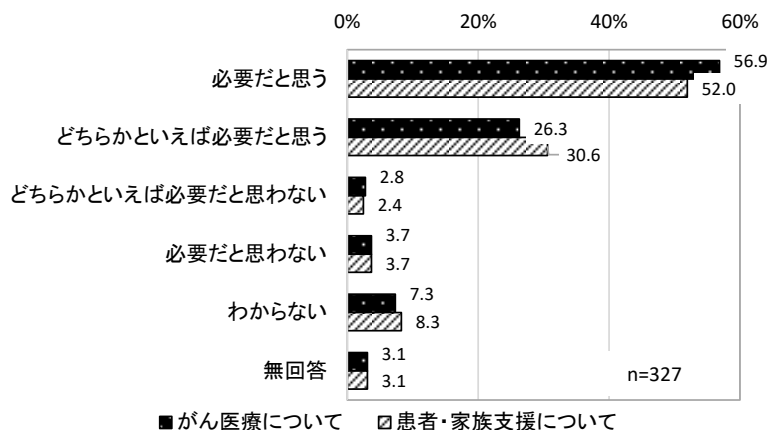
生殖医療に対応している診療所における「AYA世代」の認知度は、「言葉の意味も含めて知っていた」の割合が28.4%であった。一方、「知らなかった、聞いたことがなかった」が40.1%と一定数存在した。



■ AYA世代に対する、他の世代とは異なる対応の必要性（問3）

AYA世代に対する、他の世代とは異なる対応の必要性に関しては、「必要だと思う」が、がん医療については56.9%、患者・家族支援については52.0%であった。

図表 117 AYA世代に対する、他の世代とは異なる対応の必要性



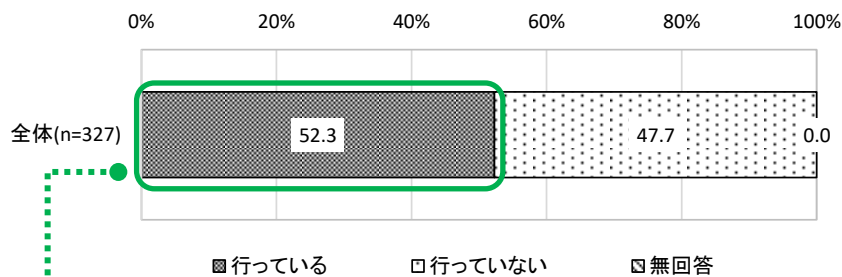
3) 生殖機能の温存

■ 不妊治療の実施の有無、AYA世代への対応状況（問4、4-1）

不妊治療の実施の有無は、「行っている」が52.3%、「行っていない」が47.7%であった。

不妊治療を「行っている」と回答した診療所に対して、AYA世代のがん患者の不妊治療の実施の有無を尋ねたところ、「行っている」は28.7%、「行っていない」は70.2%であった。

図表 118 不妊治療の実施の有無



▶ 図表 119 AYA世代のがん患者の不妊治療の実施の有無

